

希望に満ちた 終のすみか

—さんや
—山谷のホスピス長屋「きぼうのいえ」—



きぼうのいえ施設長
山本雅基

きぼうのいえ看護主任
山本美恵



インタビュアー
山崎咲子

東京ほくと医療生協
あらかわ虹の里
ショートステイ相談員

やまもと・まさき

1963年、東京都生まれ。95年、上智大学神学部を卒業後、難病の子どもと家族を支援するNPO法人「ファミリーハウス」の事務局長を務める。01年、美恵さんと結婚。02年4月、緊急一時保護施設「なかよしハウス」、同年10月に在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」を開設。主な著書に「山谷でホスピス始めました。」(実業之日本社)、「山谷でホスピスやっています。」(実業之日本社)がある。

やまもと・みえ

1958年、長野県生まれ。東京都立豊島看護専門学校卒業後、心臓血管研究所附属病院、新赤坂クリニックで看護師として働く。94年、医学・薬学系出版社、看護系出版社で雑誌編集に携わる。01年、雅基さんと結婚。夫婦で共に「きぼうのいえ」の開設・運営にあたる。

※「きぼうのいえ」は、社会福祉法（第2条第3項第8号）に定められた宿泊所にあたります。「身寄りがなく、行き場を失った、余命にかぎりのある人たちのための家」です。近く、「都市型軽費老人ホーム」に変更する見通し。運営費は、入居者の生活保護費と寄付金、ボランティアで支えられています。入居者は、近隣の医療機関へ通院したり、週1回往診に訪れる浅草橋で診療所を開業する医師、浅草病院を拠点に活動する医師の診察を受けたりするほか、訪問看護、ヘルパーの訪問介護、デイケアへの通所など介護保険サービスを利用しながら生活しています。

山谷にホスピスを つくりたい！

山崎 日雇い労働者のまち・東京山谷で、身寄りのない方、行き場のない方のための在宅ホスピスケア施設「きぼうのいえ」。映画「おとうと」のモデルにもなりましたが、その設立の経緯をお聞かせください。

雅基 以前、僕は10年ほどNPO法人で、難病の子どもとその家族を支援する活動にかかりました。その仕事か軌道にのり一段落ついた頃、僕自身が健康を害したこともあって退職することになったんです。あらためて、「では、僕は何をしたいのだろう」と自問し、模索していた時に、やはり究極的に困っている人の応援をしようと思った。そうだ！行き場を失い、見捨てられた人が人生の最後に光を見いだせる場所をつくりたい。それはホームレス

になった人たちのホスピスではないかと思っただけです。それと時を同じくして、美恵さんが上智大学の社会人講座「ホスピス・ボランティア」の講義を受講し、僕もたまたまそこへ「きぼうのいえ」のボランティアを探しに行っていて、僕らは出会った。僕が彼女に一目惚れして、結婚。二人で山谷にホスピスをつくることになったんです。

山崎 美恵さんは、山谷にホスピスをつくるという雅基さんの考えを聞いた時、どのように感じましたか。

美恵 面白そう！と思いましたがね（笑）。私もぜひいっしょにやりたいと思いました。私は結婚するまで、ボランティアをしたこともなかったし、山谷のこともよく知らなかった。結婚して初めてここへ来ました。

でも、思い返せば、原点になる体験がありました。市ヶ谷にある会社に勤めていた

時のことで、駅から会社まで、みんな列を乱さず歩いている路上にホームレスの人がいて、いつもすごく気になっていたんです。ある時、私は列を外れて、持っていた使

い捨てカイロを渡したら、「ありがとう」といってくれて…。次の日におにぎりを持っていくと、また「ありがとう」といつてくれた。差し

出がましいことではないか、プライドを傷つけるのではないか、といういろいろ想像しながら手を差し伸べられなかったのが、「私にもできた」と思ったんです。それからですね、迷うことがあれば行動してみようと考えようになったのは。そして一歩踏み出してみようと思ったのが、「ホスピス・ボランティア」の講義だったんです。

山崎 そこで雅基さんと出会った。自分の人生を思うように生きてみようと考える、究極的に困っている人を求めて山谷にたどり着いたと

いうのがお二人の共通点ですね。

山谷で 希望という光を発信

山崎 「きぼうのいえ」の開所にあたって、建物を確保するためにずいぶんご苦労なされたそうですね。

雅基 最初は賃貸物件でやると思ったのですが、ダメでした。結局、入居する人と血縁関係がありませんし、みんなは身寄りがなく住所も不定。しかも病を持っていて、余命宣告をされている人もいるわけです。そうすると、医師や看護師、介護ヘルパーやボランティアも必要になる。緊急事態になれば、救急車も呼ばなければいけない。ここでの看取りを考えていたので、葬儀もしたいとなると、貸してくれる所はどこもないわけです。結婚式の翌々日、二人で行った地元・山谷の不動産

屋に、「お金を借りるなら、100万円も1億円もいっしょ」といわれて、美恵さんの蓄えを担保に借金をして、土地を買い、施設を建てることにしたんです。

山崎 そして完成した「きぼうのいえ」。いつ頃から山谷という地域に溶け込んだと感じられましたか。

雅基 ある入居者がこういうんです。「『きぼうのいえ』ができた当初は、俺たちには関係のない社会福祉施設が建ったと、くそ面白くもないという目で見ていた。ところが、そこへ自分たちの仲間が入所し、スタッフに手を引かれて、楽しそうに買い物や散歩に出かけている。『きぼうのいえ』の住人が亡くなった時は、賛美歌を厳かに歌いながら出棺し、霊柩車が去っていくのを合掌して見送っている。もしかすると、俺たちにもこういう最期があるのかもしれない

と思った」と。山谷では路上で行き倒れて死んでしまふとか、ドヤの中で誰にも看取られずに死ぬというケースがよくあります。それが、「俺たちにも希望ができた。『きぼうのいえ』は、山谷の光の発信地となって、このまちを変えていくぞ。それは、もう始まっている」と、当事者の側からいつてきてくれた。とてもうれしかったですね。

「きぼうのいえ」で人生を生き直す

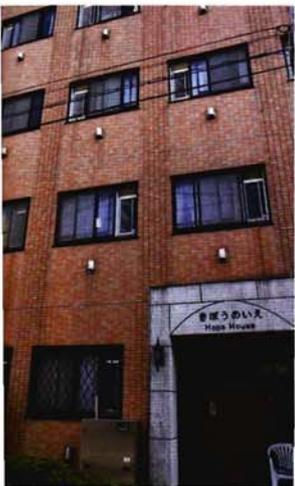
山崎 「きぼうのいえ」は、山谷で命ある限り生き抜く人たちのホスピス長屋だと雅基さんはおっしゃっていますね。「きぼうのいえ」はホスピスですが、死に向かう時を過ごす場ではなく、生き直し、人々と関係を結び直す家でもあるわけですね。

雅基 まさにその通りです。「きぼうのいえ」は、人生を

まとめ上げていく場所。過去に切れてしまった血縁関係や、壊してしまった人間関係と和解する。辛く、ひどいことばかりの人生だったけれど、人生の最期が輝いていれば、「こんな人生でも、そんなに悪いものではないな」と、自らの人生とも和解できる。さらに、いのちを与えてくれた存在に対して心を開くことができる。「神も仏もあるものか」という言葉を吐いていた人が、「神様、仏様、ありがとう」といえる領域までいけたらいいなと思うんです。そのために、しっかりと生き、しっかりと死なせてくれる場所として、「きぼうのいえ」はあるんですね。

山崎 これまでいろんな方々の看取りをされてきたわけですが、印象的なエピソードがあればお聞かせください。

雅基 開設から8年が経ち、ここで111人の方が亡くなっているんですが、111人それぞれにドラマがありましたね。例えば、ある入居者の場合、在宅酸素では間に合わないくらいに酸素吸入が必要になったので、救急車を呼びました。彼を救急車に乗せ、これから病院へ行って、そこで最期の時間を迎えることになることと伝えました。「きぼうのいえ」には、もう戻れないですね。すると彼は、「降ります。『きぼうのいえ』に戻ります」といいます。もっと酸素を供給しなければ、呼吸不全で死を迎えることが予想できたのですが、彼は断固として降りるといいます。そして、救急車を降りて翌日未明に亡くなりました。



「きぼうのいえ」の外観



どんな状況であっても彼は、病院ではなく、「きぼうのいえ」で最期を迎えたいといひ続けたことは、僕にとつては大きな事件でした。

山崎 そんなことが…。

美恵 その時は、スタッフはもちろん、彼と仲良くしていた人たちがみんな集まってきて、最期は私の腕の中で逝かれました。亡くなる時に、「逝きたくなったら、楽にしたいからね。死は肉体の卒業で、魂の故郷に帰ること。肉体を卒業する、お祝いだからね」という話をしてね。意識がないようでも、話をしっかり聞いてくれているのが伝わってきました。そして、「ここにきてくれて、ありがとう。いろいろ楽しいことがあったね。みんなの愛を引き出してくれて、本当にありが

とう」と私がお礼をいい終えたら、うんと頷くように深く呼吸をして旅立れました。

雅基 「きぼうのいえ」では、腕の中で亡くなるという事例がたくさんあるんです。

美恵 何かと人に強くあたると、結構わがままな90歳近くのおばあちゃんの話ですが…。彼女は糖尿病がひどくて、血糖値が上がったかと思うと、急に下がって、意識がなくなったりすることがあったんです。ある夜、意識がなくなっているのを見つけて、当直のスタッフと二人で手元にあつたおまんじゅうを口に入れながら、ずっと名前を呼んでいたんです。ブドウ糖を飲ませたりして、何とか意識が戻った。その時、「今、三途の川を途中まで渡っていたけど、あなたたちが私の名前をずっと呼んでいるのが聞こえた。どんなに私のことを思っ

母性が、山谷を救う！

山崎 「きぼうのいえ」は、映画「おとうと」で描かれるホスピスのモデルになりました。山田監督との出会い、撮影秘話のようなものがあればお聞かせいただけますか。

くれているか、どんなに愛してくれているかが分かった。だから戻ってきた」とおっしゃったんです。その時は、「よく戻ってきたね」といって、言葉の意味をよく考えなかったんですけれど…。それから毎晩、彼女は寝る前に「私はもういつ死んでもいい。みんなにごく愛されているのが分かったから、思い残すことはない」とスタッフに話すようになった。彼女が自分も愛されていることを知って、とても満足していたんですよ。だからもう思い残すことはない」と…。

雅基 彼女にとって、いのちの宿題は愛されているということを十分に味わうことだったんでしょうね。それを経験できたので、いつ死んでもいいと感じ、心安らかに今生のいのちの卒業を迎えることができたのではないのでしょうか。

山崎 山田監督とスタッフの方々が、初めて「きぼうのいえ」へ歩いて向かっている時に、美恵さんと出会っているんだよね。その印象を山田監督が、「華奢な女性が自転車に乗ってやってきて、『松竹の方ですか。私、山本です。認知症で徘徊癖のある入居者を探しにくいです。すぐ戻りますから』と

いって、走り去っていった。もっと、肝っ玉母さんみたいな人なのかなと思っていました。とおっしゃっていました。この最初の出会いの印象で、山田監督の創作イメージがずいぶん変わったようです。

山本雅基さん、美恵さんの
サイン入り著書を
プレゼント!

『山谷でホスピスやっています。』
実業之日本社

※本誌雑誌込みハガキ
にて、ご応募ください。

3名様



だから、美恵さんの役は、腹の据わった凄みのある人ではなく、穏やかで優しいイメージの石田ゆり子さんが演じることになったようです。それは正解だったと思いますね。これまで山谷にはいろんな運動家も入ってきたし、いろんな宗教の原理主義の人たちも入ってきた。暴力や、さまざまな力というものに山谷の人たちは翻弄され、そこに期待もかけながら常に失望してきました。でも、人生の最期の時、何が山谷の人たちを救うかという、母性なんです。観音様のような母性が、山谷の人たちの荒んだ心を和ませて、安らかな境地へ導いていくんだと思います。

山谷が、我が家になる

山崎 では最後に、「きぼうのいえ」の今後についてお考えになっておられることをお聞かせください。

雅基 3500人ほどいる山谷のまちで、「きぼうのいえ」に入居できるのは最大32人。99%の人は入れないんです。「それで、あなたは平気ですか」と自らに問いただすと、やっぱり現状に満足しているのは恥ずかしい。とはいいえ、「きぼうのいえ」を100軒建てて、もちろんできません。だしたらマンパワーを利用して、「きぼうのいえ」の考え

方を山谷に巡らせていこう。そう考えて2006年に訪問介護をおこなうヘルパーステーションを開設しました。「山谷でホスピス始めました」という当初のスタンスから、今では「山谷全体をホスピスにしたい」という

思いが広がっています。「きぼうのいえ」を拠点に母性を抱いた人たちを送り込むことで、憎しみ、恨み、涙で彩られてきた山谷の地を、聖なる場所へと変えていきたいと思っています。

美恵 「きぼうのいえ」では、スタッフやボランティアさんたちが、ここで働くことを喜びにしてくださいっています。

雅基 きぼうのいえ・イズ・マイ・ライフ! というか、ここで働くことが、人生そのものという感じにね。

美恵 介護という仕事に人生をかけている喜びが、介護される側にも伝わる。だから入居者さんも楽しいんだと思うんですね。そうした人間同士のいい関係を、これからもつくっていききたいですね。

雅基 ひとつ屋根の下で

らす、大きな意味で家族なんですよね。そもそも、ここにいる人たちを、「もう一人の自分」と思って迎え入れていきますから。そう考えると、関係のない他人ではなく、自分と他人との狭間というか、境界線が消えていく。セルフイメージの拡大とでもいうのでしょうか。だから、何かをしてあげるといふことを超えて、山谷の人たちみんなを自分自身として受け入れられるんですよ。

山崎 さらにイメージが広がれば山谷全体が、さらに日本中が、世界中が我が家になり、家族になる。誰もが我が家にいるように最期を迎えられるまちというのも素敵ですね。私たち医療生協も、医療・介護・福祉の在宅支援サービスなどを提供できる事業とまちづくりにとりくんでいきたいと思っています。今日はありがとうございました。(編集部)



「きぼうのいえ」内の礼拝堂に並ぶ遺影